

# 上代人の表記意識と用字法

——万葉集における之字をめぐる——

鶴

久

## 一

白雪之 しらゆきの つねしくふゆは 常敷冬者 すぎにけらしも 過去家良霜 はるかすみ 春霞 はるかすみ 田菜引野辺之 たなびくのへ  
鶯鳴焉 うぐひすなくも (万・十・一八八八)

右の歌の之字はシ・ガ・ノと訓まれる用例が多いために、それに従って、従来タナビクノベノと訓まれてきたが、当時の表現法や意味上から傍例に照合して、漢文における助字の用法の一である存在場所を表示する、いはば、日本語の格助詞ニに相当する文字用法であることを指摘し、本誌二十七号の拙稿においてタナビクノヘニと改訓したところである。万葉集卷十は集中でも之・者・焉等の漢文の助字用法に基づく文字用法が多彩を極め、日本語の格助詞ニに相当する之字の使用例が存在しても決して不思議とは思はれない。とすると、卷十ほど顕著ではないが他の巻においても漢文の助字としての種々の用法をしてゐる之字が、ま

ま散在してゐることを考慮した場合、日本語の格助詞ニ・ヲ、或いは間投助詞ヲ等に相当する用法なども存在するのではないかと考察してみることが無意味ではなからう。

しかしながら、上代における之字の用法が複雑にして且つ多岐を極めてゐることについては、すでに福田良輔博士にすばらしい研究がある。「書紀に見えてゐる「之」字について(古代語文ノート所収)・万葉集の之について(京都帝国大学二十五周年記念論文集所収)」したがって、拙文はその統制に過ぎない。いはば落穂拾ひの謗はまぬがれないが、万葉集は勿論、他の上代文献における文字用法を解明するためにも更に上代人の言語意識・表記意識をよりよく知るためにも、疑問視される事例については少しく言及してみたいと思ふ。

## 二

朝髪之 念乱而 如是許 名姉之恋曾 夢爾所見家留

(四・七二四 坂上郎女)

右一首は写本にほとんど異同はなく、「アサカ(ガ)ミノ、オモヒミダレテ、カクバカリ、ナネガコフレゾ(ソ)、イメニミエケル」と訓まれ、解の上でも例へば「寝起の髪のやうに思ひ乱れて、それほどまでにあなたが私を恋しく思つてくれるので、私の夢にも見えた事であるよ(註釈)」と口語訳されてゐるやうに、現在の諸註ほとんど大同小異である。江戸時代においては異説もないわけではなく、例へば、本居宣長は「四の句こふれぞなねがと打ち返して心得べし」といひ、古義は「名姉が恋ればそといふ意に見るときは、郎女を恋るよしよみておこせる大嬢の歌ありて、さてそれに答へて思ひ乱れて如此恋と言ふ如く、然ばかり汝が恋ればぞ吾夢に汝が見えけるといふ意に見ざればいかにも聞えがたし、されどしか云むは唯打聞えたるままにて、古語にくらく公ならぬ論なり」といつて宣長の説に従つてゐる。新考は「もし宣長の説の如くば、初よりコフレゾナネガとあるべし。何ぞまぎらはしくナネガコフレゾといはむ。又ナネガコフレゾイメニミエケルとあるもいかでか我恋フレバゾ我夢ニ汝が見エケルと釈かむ」と反對してゐる。現在の諸註も「名姉之恋曾」と写本一致してゐるのを、わざ／＼転倒したものと考へることに頗る抵抗を感じ、加へて左註に「右歌報ニ賜大嬢進歌也」とあることから、大嬢が郎女を念乱而恋ふ歌があつたものと見なして、

宣長や古義の説は顧慮されなかつたものかと思はれる。

しかしながら、歌一首考へた場合「思ひ乱れて恋ふた」のは郎女自身のことを言つてゐるやうに見える。この歌は七二三番の長歌の反歌であり、特に、七二三番の歌に

常世にとわが行かなくに、を金門にも悲しくに念へりしあが子のとじを、ぬば玉の夜昼といはず、思ふにしが身はやせぬ、嘆くにし袖さへ沾ぬ、かくばかり本なし恋ひばふるさとにこの月ごろもありかつましじ

(四・七三三)

とあるのを思へば「思ひ乱れて恋ふ」といふ表現は郎女自身のこととして極めてふさはしい表現と思はれる。しかも「かくばかり」とあることからすれば

如此許恋つつあらずは高山の磐根しまきて死なましもの(二・八六)

に代表される、多くの同様な発想法・表現法をした例はいふまでもなく

如是許恋ひむものぞと思はねば妹が手本をまかぬ夜も

ありき(十一・二五四七)

可久婆可里恋ひむとかねて知らませば妹をば見ずぞあるべくありける(十五・三七三九)

などの「かくばかり」を参看したとき、「かくばかり」は自分のこと、自分の行動・動作に直接関係してゐるときに使用されてゐる語と思はれ、「郎女が大嬢を恋ふてゐる」

様を「かくばかり」と表現したものと見なされる。ただ、

註釈が指摘してゐるやうに

わが背子が如是恋礼許曾ぬば玉の夢に見えつついねら

えずけれ(四・六三九)

の歌を加味すると、「かくばかり」といふ語もさして問題でなくなるやうであるが、かくは「このやうに」といふ意で恋ふる状態を指示してをり、かくばかりは「これほど」「こんなに」といふ意で、恋ふる程度を表示してをり、必ずしも同一視できない面があるやうに思はれる。註釈に引用された六三九番の歌は湯原王が娘子に贈られた歌

ただ一夜へだてしからにあら玉の月か経ぬると心まど

ひぬ(四・六三八)

に対する娘子の答歌であり、湯原王の歌を指して、かく||このやうにとあるのも当然のこととして諾なはれる。しかしながら、当面の「かくばかり」は「朝髪<sup>あさかみ</sup>のやうに思ひみだれて」恋ふる程度をさしてゐることを思へば、例へばむらきもの心くだけて如此許<sup>かくばかり</sup>あが恋ふらくを知らずかあるらむ(四・七二〇)

の「かくばかり」の用法と同じ手法と見なされ、やはり自分自身のことについて言つたものと思はれる。しかのみならず、

菅の根の念乱<sup>おもひみだれて</sup>而恋<sup>おもひみだれて</sup>つつもあらむ(四・六七九)

玉の緒の念乱<sup>おもひみだれて</sup>而ぬる夜しぞ多き(十一・二三六五)

苅こもの念乱<sup>おもひみだれて</sup>而死なましものを(十一・二七六五)

解衣<sup>おもひみだれて</sup>の念乱<sup>おもひみだれて</sup>而恋ふれども……(十二・二九六九)

苅草<sup>おもひみだれて</sup>の念乱<sup>おもひみだれて</sup>而ぬる夜しぞ多き(十二・三〇六五)

山菅<sup>おもひみだれて</sup>の思乱<sup>おもひみだれて</sup>而恋<sup>おもひみだれて</sup>つつ待たむ(十二・三二〇四)

の如き同じ発想法・表現形式をした歌の「思ひみだれて」がこれ亦自分自身のことについて言ふ語、或いはその人の立場に立つて用ゐる語であることを考慮すれば、問題歌の「朝髪<sup>あさかみ</sup>の思ひみだれてかくばかり恋ふ」といふのは、郎女自身のことを言つたものと見なすのが自然な解釈のやうである。宣長が「恋曾名姉之」の転倒したものと考へたのも、このやうに文脈上から見てのことではないかと付度される。しかし、倒置と考へるのはあまりに本文を恣意的に改変したやり方で、近代の本文批評の立場からは、他に余程の傍証がない限り首肯できないことである。それでは如何に解釈すべきであらうか。結論から先に述べると「名姉之恋曾」の之字はガを表はすものでなく、やはり漢文の助字の用法の一である対象格に用ゐた、つまり日本語の格助詞ニに相当する用法と見なされ、ナネガコフレゾでなくナネニコフレゾと訓むべきものと思はれる。さう施訓して、七二三番の長歌の反歌としてもふさはしく、文脈から見た場合の難点も解消されてしまふのである。当時、相手の人が自分を思うから夢に見えるといふ考へがあつたことは事実であるが、他方、

旅にいにし君しもつぎて夢に見ゆあが片恋のしげければかも(十七・三九二九)

ま野の浦のよどのつぎはし心ゆも思へか妹が夢にしみゆる(四・四九〇)

間なく恋ふれにかあらむ草枕旅なる君が夢にし見ゆる

(四・六二二)

思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを(古今・十二・五五二)

等の例でもわかるやうに、自分が相手の人を思ふからその人が夢に見えるといふ考へも存在し、平安朝・鎌倉を通してなほ現代に生きてゐるのである。加へて、坂上郎女の長歌とそれに対する反歌との関連(三七九・三八〇番、四六〇・四六一番、六一九・六二〇番、四二二〇・四三二一番等)、併せて郎女の歌に見られるかく・かくばかりの語の用法を参看した場合、ナネニコフレゾと訓読するのが穏当と思はれる。

因みに、他の坂上郎女作歌に見える之字の用法も参考になると思ふので一言付記してみたい。左の歌については從來ほとんど注意されることはなかったが、

おほなむち少名彦名の神こそは名づけそめけめ、名のみを名児山とおひて吾恋之千重之一重裳なぐさめなくに(六・九六三)

の傍線部はこれまでワガコヒノと訓んで意味上別に齟齬しないためか異説をみなかった。この例として之字がノ・ガ・

シと訓まれるのが普通であるための施訓であつて、必ずしもワガコヒノと訓まねばならないことはない。この之は動詞の連体形と次の体言とを結ぶ機能を示す漢文の助字の用法と見て正鵠を得てゐるものである。したがつて、

吾恋千重之一隔毛なぐさもる(二・二〇七 人麻呂)

吾恋流千重乃一隔母なぐさもる(四・五〇九 丹比笠麻呂)

吾恋流千重乃一重母人知れずもとなや恋ひむ

(十三・三二七二)

の如き用例を加味して、アガコフルと訓むこともできる。そして、先達もしばく指摘されてゐるやうに(ハ例へば屋敷頼雄氏ハ大伴坂上郎女(万葉集講座第一巻所収・春陽堂)∨)手元にあつた古歌集の名歌を模倣したと思はれることや(試みに佐々木信綱博士「万葉集研究第三」を参照)

名草山ことにしありけり吾恋千重一重もなぐさめなくに(七・二二三)

の如き、よき傍証例が存在することを考慮するとき、アガコフルと訓む可能性は強いと思はれる。

### 三

妹目之 見巻欲家口 夕闇之 木葉隠有 月待如

(十一・二六六六)

右の第一句は諸注「イモガメノ」と訓んで異訓を見ない。

妹目之の字面からして、最も可能性の濃い妥当な訓と考へられ、異見のないのも当然なことと思はれる。イモガメノミマクホシケクといふのは「妹の顔を見たいこと」つまり「妹に会ひたいこと」を言つてゐるのであり、諸注の解する通りであるが、それにしては「イモガメノ」では少々異様に感じられる。上述の意味ならば、当然「イモガメヲ」でなければならぬ。見るといふ動詞は例へば

石遠たれ見き(五・八六九)

いつしかも都乎見むと(五・八八六)

ふる雪乎見ずてや妹がこもりをるらむ(二十・四四三九)

君があたり乎見ずてかもあらむ(一・七八一云)

わがふる袖乎妹みつらむか(二・一三二)

奈良の都乎見ずかなりなむ(三・三三二)

君が姿乎よく見ずて(十・一九二五)

の如く、すべて格助詞ヲをとり、例外と見なすべきものはなく、用例も極めて多い。しかも、妹・君・人を見る場合にしても、

妹ら遠見らむ(五・八六三)

わぎもこ乎行きてはや見む(十五・三七二〇)

家なる妹乎また見てももや(二十・四四二五)

わぎもこ乎つぎてあひ見む事はかりせよ(四・七五六)

おほほしく妹乎あひ見て後恋ひむかも(十・一九〇九)

君乎ば明日より外にかも見む(三・四二三)

夢のごと君乎あひ見て(十・二三四二)

酒のまぬ人乎よく見ば(三・三四四)

釣せぬ海人乎見てかへり来む(九・一六六九)

の如く、枚挙に遑なく例外もない。いふまでもないことではあるが

深見流乃見巻欲跡(六・九四六)

の如きノをとつた例はある。これはフカミルノのミルが見ると同音であるために、同音による修飾を示す枕詞であり、これは例外とはなり得ない。又

視人乃語丹為者聞人之視巻欲為(六・一〇六二)

の如き例もある。この場合、ノは主格を表示したもので、客語を表はしたものでなく、かかる例が例外でないことも明瞭である。しかのみならず、見るの久語法といはれる形においても

はこやの山乎見木久近けむ(十六・三八五二)

かくのごと君乎見麻久は千年にもがも(二十・四三〇四)

妹が姿乎見巻くるしも(二・三三九)

生ける日の為こそ妹乎欲見すれ(四・五六〇)

たえずて人乎欲見こそ(四・七〇四)

馬なめてみ吉野河乎欲見(七・一三二六)

筑波の山乎欲見(九・一七五三)

のやうに格助詞ヲをとること言ふまでもない。当面の歌のやうな場合において、格助詞ノやヲ以外の他の格助詞をと

ることは、例外といふよりもむしろ異質のものと思はれる。したがって、当面の問題歌の之字を漢文の助字用法に基いた語中助字的文字用法と見なせば、何もノ・ガとのみ訓まねばならないことはなく、強調したものとして訓まなかつたり、格調や当時の他の用例からして、日本語の語法によつてイモガメヲと訓読しても何等差支へないところである。前に挙げたきた事例からすれば、イモガメヲと訓むのが穩当であるし、難点も解消されてしまうのである。さうして、

君が目乎見<sub>レ</sub>久<sub>レ</sub>ならば (十七・三九三四)

妹が目乎見<sub>レ</sub>む (十二・三〇二一)

いつしかも都へ行きて君が目乎見<sub>レ</sub>む (十二・三二三六)

妹が目乎見<sub>レ</sub>まくほり江のさされ浪 (十二・三〇二四)

等の例からしてもわかるやうに、「イモガメ」「キミガメ」を見る、即ち、妹に会いたい・君に会いたいといふときには格助詞ノをとることはなく、必ずヲをとつてをり、イモガメヲでなければならぬと思はれる。そこで、一言付け加えるならば、

公目 見<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub> このふたよ 是<sub>レ</sub>二夜<sub>レ</sub> ちとせのごとも 千歳如<sub>レ</sub> あはこふるかも 吾恋哉

(十一・二三八一 人麻呂集)

の第一、第二句にも異説があるが、既述したことから、第一句はキミガメノでなく、旧訓・代匠記・考・総釈・大系・注釈などのやうに「キミガメヲ」と訓むのが當を得てをり、したがって第二句も三句以下との関連において「ミマ

クホリシテ」と訓んだ註釈書に従ふべきであらう。

#### 四

波瀾はな 今為妹之 浦若見 咲見さきみ 愠見いみ 著四紐解つしむとく

(十一・二六二七)

この歌の第二句も「今為妹之」となっているのので、諸註釈書は之の字面の忠実に「イマスルイモガ」と訓んでゐる。しかし、第三句が「ウラワカミ」となっているのので、かかる構文法の場合は周知の如く

人目ひとめ 乎多美おほみ (二・二〇七)

光乎ひかり 伎欲美きよみ (十五・三五九九)

すべ乎なみ 無三なみ (四・五四三)

谷乎ふかみ 布可美ふかみ (十七・四〇〇三)

の如く、上に助詞をとる場合ヲをとり、ガなどの他の助詞がくることはない。即ち、形容詞の語幹にミ語尾がついて「ゝがゝので」といふ意味を表はすときには、何も前記の例のみならず、上に助詞をとるときは、例へば

山越やま しの風乎とき 時自見よみ (一・一六)

浦乎よみ 吉美よみ うべも鈞よみ はす浜乎よみ 吉美よみ うべも塩よみ やく

(六・九三八)

君が心乎うる 宇流波之美はしみ (十七・三九六九)

あはぬ日乎おほみ 多美おほみ (十二・二八八八)

富士の嶺たかみかしこみ 乎高見たかみ 恐見おそみ (三・三二二)

草枕くさまくし たび乎久流之美くらしみ (十五・三六七四)

夜乎よ 寒三朝戸さむい をあけて出で みればみれば (十・三二八)

あしひきの山呼やま 木高こたかみ 三さん (十二・三〇〇八)

のやうに、例外なくヲをとつてゐる。勿論、格調上「ヤマタカミ」の如くヲを省略することはあるが、ヲ以外の助詞をとることはない。したがつて、今為妹之をイマスルイモガと訓読すれば例外となる。「ゝヲ十形容詞語幹＋ミ」の型は上代における一種の構文法であり、唯一の例外として「イマスルイモガウラワカミ」の訓を認めることには極めて抵抗を感じる。

(イ) 思はぬいたらばいもがうれしみと に到者妹之いたらばいもがうれしみと 飲三跡いんさんしき ゑまむ眉まゆ ひき思おも はゆるかも

(十一・二五四六)

(ロ) 待つらむいたらばいもがうれしみと に到者妹之いたらばいもがうれしみと 懽跡くやしき ゑまむ姿すがた を行きて早見はやみ む

(十一・二五二六)

(ハ) 若草そのつまのこはさぶしめ の其その 嬌子けうし 者不な 怜弥可めいよか おもひて寐ね らむ悔くやしき 弥可めいよか おもひ

恋らむ (二・二二七)

の如き例はあるが、(イ)(ロ)の「妹之」は「妹がうれしいので」といふ意でなく、「咲牟」「咲」を修飾してゐる、つまり主格に立つてゐるのであり、(ハ)も同様に「思ひて寐らむ」「思ひ恋らむ」の主格に立つてをり、形容詞の語幹にミ語尾が接して「ゝがゝので」といふ意を表はす場合とはおのづから性質・事情を異にしてゐるのであつて、決して

例外の根拠とすることはできない。それ故、新考は「宜しく之を乎の誤としてイモヲとよむべし」と誤字説を提出したのであらうが、之・乎の誤写はあまり一般的でなく、両者は草体からしても相似ず、写本一致して之字になつてゐるのを乎字の誤写として認むべき理由はない。「イヲ十形容詞語幹＋ミ」は当時の構文法の一でもあり、一種の成語でもあるからして、当時の人々には自明のこととして「イマスルイモヲウラワカミ」と訓まれたものと推察される。之字が漢文の助字としての用法に従つて表記されたものとするれば、訓まなくとも差支へなく、ただ歌の格調からして、

当時の構文法や成語などに基いて助詞を補つたりするわけ  
で、集中や他の上代文献の用例に従つて施訓することは当然のことである。漢字・漢文を借りて日本語を表記した上代人が「イマスルイモヲウラワカミ」と言ふべきところを漢文の助字を用ゐて「今為妹之浦若見」と表記したとしても何ら異とするに足らず、之字を乎字の誤りとした点は排除するべきではあるが、イモガをイモヲと訓むべきだとした新考の考へは当を得たものと賛成すべきであらう。之字は必ずしも表記しなくとも「イマスルイモヲウラワカミ」と訓むべき点では変ることではない。むしろ、之字を用ゐないで「今為妹浦若見」とあつた方が、現在の之字の把握からは正しく訓読されたかも知れない。

はねかづらいまするいもをうらわかみ今為妹乎浦若三いざいざ川の音のさやけさ

の好傍証例からしても「イマスルイモヲ」と訓むのが穩当であらう。さうして始めて、之字における漢文の助字の用法も統一的に理會され、上代人の漢字・漢文の駆使もより深く把握することができるようであらう。

以上の如き考察からすれば

芳野河よしのが 逝瀬之早見しほしきも 須臾毛よどむことなく 不通事無ありこせぬか 有巨勢濃香  
問(二・二一九)

の第二句も諸註釈書ほとんど「ユクセノハヤミ」と訓んでゐるが、当然「ユクセヲハヤミ」と訓みたいところである。したがつて、檜婦手は「今本乎作之ヨルニ。古本に随へり」といつて、本文を乎に作りユクセヲハヤミと訓んでゐる。本文が乎であれば問題ないが、現存の写本はすべて之になつてをり、檜婦手の言ふ古本とはどのやうな本を言つたものか不明である。古義は「逝瀬が早き故にの意なり。さて、この之は必ず乎とあるべき処なるをかくいへるは甚めづらし。この例は外に見当らず：(中略)：若は之は乎字を写誤れるにはあらざるか、又は是は借り字にて早水はやみの意にもあらむか。類聚抄には見字なし。これによればハヤクと訓むべし」の如く、ユクセノハヤミの訓みに納得されない故に種々の見解を述べてゐる。新考は之を乎の誤字として、ユクセヲハヤミと訓んでゐる。口訳は理由は述べてゐないがユクセヲハヤミとしてゐる。しかし、写本一致



して之となつてゐるのを簡単に乎の誤字と断定するのはあまりに恣意にすぎる。乎・之の草体も似ないし、乎・之の誤写例も見あたらない。それ故、他の註釈書は字面に即した訓ユクセノハヤミに従つたものの、全註釈はやはり他の多くの用例を比考した場合、頗る異様に感じたのであらうか、このところの説明として「形容詞の語幹に『み』のついた用例は『心を病み(一・五)』『都を遼み(一・五一)』の如く、上に『を』の助詞を用ゐる例であるのに、ここには『の』とあるので誤字説なども行はれてゐるが『波瀾縹今為妹之浦若見(十一・二六二七)』の例もあり、『山高み(三・三三四その他)』の例もあり、必ずしも『を』の助詞を用ゐるに限らないから誤字とすべきではない」といって、誤字説をさけ従来の訓に従つてゐる。なるほど誤字説をさけた点妥当してゐるが、卷十一・二六二七番の歌は前に考察した通り、イマスルイモガウラワカミと訓むべきではなく、イマスルイモヲウラワカミと訓むべきであつてみれば、全註釈のいふやうに例外の根拠とすることはできず、むしろ、二六二七番の歌によつて逆に当面の問題歌もユクセヲハヤミと訓むべきものと考へられる。又、「山高み」のやうにヲを省略することは普通のことではあるが、それは格調によつて省略することがあるだけであり、それだからといって、ユクセノハヤミ・イマスルイモガウラワカミと助詞ノ・ガでも差支へないとはできない。「ノヲ」形

容詞語幹「ミ」は再三述べたやうに上代における構文法であり、一種の成語でもあり、助詞ノ・ガがくることは頗る定石を佚した破格と言はねばならない。されば、全註釈も改訂増補版では「ハヤミは早いことの意の体言。瀬ヲ早ミのような形は普通であるが、かように助詞ノを受けて体言となる形もある。『夏野之繁見丹開有姫由理乃(卷八・一五〇〇)』『波流乃野能之気美登妣久久鶯音太爾伎加受(卷十七・三九六九)』のシゲミの如きはこれである」と体言シゲミと同様に解している。それにしても「逝瀬之早見」は「逝瀬が早くて」といふ意味であり、ハヤミを体言と解することはできず、やはり、「山を高み」「心を痛み」などと同一構文であることは否めない。したがつて、ユクセノハヤミでは歌一首の真意に至らないわけで、かかる難点のある訓に拘泥することなく、之字は漢文の助字的用法に従つたものとして、前に考察したとことと相俟つて「ユクセヲハヤミ」と施訓するのが当を得てゐると思はれる。

## 五

これまで万葉集における之字の用法について言及し、改訓すべきと思はれる例は改訓してきたが、これで之字における漢文の助字的用法が残りなく取り上げられたわけではない。まだ気づかずに埋もれてゐる例もあらう。気づいて

も証明が困難であつたり、シ・ノ・ガの訓によつても解釈が可能であつたりする例などには言及しなかつた。例へば

春之雨者<sup>は</sup>いやしきふるに<sup>に</sup> (四・七八六)

つばすみれこの春之雨<sup>に</sup>爾盛<sup>に</sup>なりけり (八・一四四四)

春之雨<sup>に</sup>爾ありけるものを (十・一八七七)

の傍線部は従来、ハルノアメと訓まれてゐるが、「波流佐米<sup>はるさめ</sup>」(十七・三九六九)や「春雨」と表記してハルサメと訓んだ多数の例からしてハルサメと訓むべきではないかと考へられもする。「春之雨」の例は集中右の三例で、之字は体言と体言をつなぐ漢文の用法で、日本語の格助詞ノにあたるが、必ずしもノと訓まねばならないことはない。「雨間<sup>あまま</sup>」に対して「雨之間<sup>あまま</sup>」(十二・三三二四)の事例が存在することと考慮すると、「春雨<sup>はるさめ</sup>」に対して「春之雨<sup>はるさめ</sup>」の事例が存在しても至極当然なことであり、「春之雨」の之字は「雨之間」の之字と同一用法と見なして一向差支へない。されば、ハルサメは当時の慣用句とも考へられることを加味した場合、「雨間」に対する「雨之間」もアママと訓んだと同じやうに、「春雨」に対する「春之雨」も等しくハルサメと訓むことは洵に自然な訓法と考へられるのである。しかしながら、一方

秋之雨<sup>あきのあめ</sup>爾ぬれつつをればいやしけど吾妹が宿し思ほゆ

るかも (八・一五七三)

の例を参看すると、アキノアメに対してハルノアメといふ

語の存在も当然考慮され、加へて、ハルノアメニ・アキノアメニともに単独母音アを含む六音といふ格調上字余りの例外ともならず、絶対にハルサメと訓まねばならないと断言することはできない。ただ、ハルサメと訓む可能性があるとといふことだけは言へる。先年、松江で開かれた万葉学会の折、一夜宿をともにした蜂矢宣朗氏は八巻四・巻八の「春之雨」はおくとしても巻十の「春之雨」の事例だけは、巻十の文字用法からしてハルサメと訓むべきではないか。Vと話されたことがある。蜂矢氏の言の如く、巻十の「春之雨」に限ってハルサメと訓むべきではないかといふことを付言して稿をとちることにする。

(本学助教授)